

ダンボールコンポストの不思議な魅力

—NPO法人・循環生活研究所の取り組みをもとに—

別府大学文学部

講師 長尾 秀吉

① 「土が臭い」と感じる子どもたち

- 「生ごみがなくなるのに驚いた！」
- 「コンポストに入れると生ごみが臭わなくなる。」
- 「上手に（堆肥が）できて嬉しかった！」
- 「野菜や植物を育ててみたい！」
- 「全国にコンポストのことを広めたい！」
- 「家でもコンポストをしてみたい。地域の人も協力してください。」

これは、NPO法人循環生活研究所の支援を受けて福岡市立I小学校「総合的な学習の時間」で取り組まれてきたダンボールコンポストの成果発表で聞かれた子どもたちの感想である。

ダンボールコンポストは、何処にでもあるダンボール箱を使い、箱の中に量販店で売っているピートモスと籾殻燻炭を3対2程の割合で入れれば出来上がり、そこに生ゴミを投入すれば微生物の力とダンボールの通気性によって素人でも簡単に堆肥化できるシンプル器材である。発表当日は、生ごみが堆肥にかわるまでの変化（温度計、白カビ、湯気が出ている様子など）を撮影したビデオ、温度計データや生ゴミの投入量などを記した資料や模造紙を使い、子どもたちは数ヶ月の取り組みを生き生きと発表した。

しかし、子どもたちは初めからコンポストに乗る気ではなかった。「生ゴミはくさいし不潔」、「気持ち悪い」、「ネズミやゴキブリがきそう」「ヌルヌル」、「ベチャベチャ」…、コンポストづくりに取り組む前によく聞かれる子どもたちの率直な感想だ。実際に生ゴミを見ると悲鳴が上がることもある。また、最近の子どもたちは「土」そのものに対しても、「臭い」とか「汚い」というイメージを強く持っている。

1980年代に入り、教育問題として「4本足のニ

ワトリ」を描く子どもたちの出現が取りざたされたことがあった。これは某大学の試験でニワトリとハエの絵を描かせた結果実際に4本足のニワトリや8本足のハエを描いた学生がいたという実話にもとづいている。その後も、デパートで買ったクワガタやカブトムシが死んでしまい「修理」してもらおうとする子どもや、タマネギや落花生が生えている姿を描けない学生の出現（筆者が授業時に描かせたことがある）などなど、今日まで「自然離れ」現象は枚挙に暇がない。

人そのものが自然であり、自らを取り巻く自然とactualな関係を切り結ぶことなしに人は生きていけない。ただ実際には、金銭を媒介とする分業と消費生活によって人と自然は切り離されて生活を営んでいる。こうした中では、自然は単なるモノ（商品）でしかなく、自然に対する興味や愛おしさ、畏怖、また自然に関わる人間の労苦を読みとる感性や情操が育つのは難しい。教育の世界では様々な自然体験活動の重要性も指摘され、行われてきたがなかなか芳しい成果があがったとは言えない状況ではないだろうか。

② 循環生活研究所の活動概要とコンポスト活動の広がり

ところが、今、福岡市とその近郊を中心に、子どもたちだけでなく大人たちも含めてダンボールコンポストの世界にはまり込んでいるというのである。初めは鼻をつまんだりハンカチで鼻をおおって生ゴミに「くさい、くさい」と連呼していたが、次第に「しっかり混ぜるとにおいが減り、びっくりした」、「微生物を活躍させたい」、「白いカビが生えて嬉しい（順調に堆肥化が進むと白カビが生える）」と小躍りし、いつしか家族ぐるみの取り組みとなり、さらに地域活動へと広がりをみせている。



写真1. 小学校で堆肥をつくる子ども達

ミカン箱程度の小さな自然の世界に人々が小躍りするほど夢中になっているのであるが、ダンボールコンポストの何が人を惹きつけているのだろうか。本報告では、ダンボールコンポストの仕掛人であるNPO法人循環生活研究所（以下、循生研）の活動概要と人々がダンボールコンポストに惹かれるその魅力について考えてみたい。

循生研は、福岡市東区の自然に関わるライフスタイルの追求を行ってきた「やかまし村青年団」の10名程度の青年とその家族、「フリーフリーズ」という地域フリーマーケットを楽しむ30代女性とその家族、および「コンポスト（堆肥づくり）」の研究活動を行ってきた「お母さん」（現理事長H氏）が集まり、平成16年9月に設立されたまだできて間もないNPO法人である。3つの活動といっても、それぞれメンバーは少なく且つ重複しており、家族・友人的な付き合いのある10名程度で発足した小さなNPO法人である。

循生研が追求する循環生活とは、「ご近所で顔が見え、ゆっくりと、楽しく、安全で、趣味的で、広がりのある、実践に基づいた、なんとなくシンプルでかっこいいライフスタイル」をいう。上記の3つの活動は、実際には30代の青年たちとその親たちや地元の友人たちであり、それぞれの立場で自分達がやりたい活動をやり、循環生活に興味を持つ市民に、規制や義務によってではなく、進んでやってみたいと思える様々な循環型のライフスタイルをささやかに提案・実践してきた。その結果、市民や地域団体、企業、大学、行政などから協力依頼や講演依頼が次第に多くなったため、3つの活動を1つにまとめ、より広く循環型のライフスタイルを提案しようということで法人が設立された。

具体的には、循生研の活動として次のようなものがある。

- ①コンポスト部…ダンボールコンポストの普及とコンポストアドバイザー育成の為、学校・公民館での講座や堆肥品評会、また間伐材・剪定枝や和白干潟の異臭原因となっているアオサを使った堆肥づくりなど堆肥の基材開発・研究・実践を行う。
- ②トビムシ委員会…子どもや親子で自然を楽しめる絵本づくりをめざして自然体験活動や絵本の朗読、勉強会を行う。また子ども自身もスタッフとして企画・実施する環境イベント「くるくる村」を開催。
- ③旬を食らふ会…地元福岡の旬を育て味わう活動を行う。東区の外海に位置する相能島の「島ぞうに」やコンポストで作った堆肥を入れた畑の素材を味わう。
- ④フリーマーケット…年数回、東区で行うフリーマーケット活動。すでに地域に定着しており、1回につき数千人の人々が訪れる。
- ⑤その他…もくもく工房でのものづくり、他団体との共催のイベントをはじめ、じゅんたまなど子どもによる生物調査など

尚、平成17年度の会員は29名である。運営資金については年によって異なるが17年度の経常収入は1000万円を超える額（支出も同等）となっている。

ところで、発足する前のスタッフ誰もが、「ここまで活動に対するニーズが大きいとは考えていなかった」と口をそろえる。特にその大きなニーズはコンポストに向けられている。正会員の増加は、特にコンポスト講座でコンポストの魅力にはまった人達の増加によるところが大きい。当然、事業収入もコンポスト関連による事業収入である。

アドバイザー（スタッフ）の育成は急務となっているが、スタッフ不足の17年度でもコンポストの講座開催回数は年218回、その直接の受講者数は年8000人を超える。受講者は主として大都市福岡市の市民であるが、旧浮羽町や大木町をはじめ福岡県内の農村地域の農家も少なくない。また、講座は1回ではなく、フォローの意味で堆肥品評会も行われ、受講者のリピート率も非常に高い。受講申込は、10名～200名近いグループ単位で行われ、地域団体やサークル、学校（学年・クラス）、企業、農家集団、行政の市民講座など様々である。

小さなライフスタイルの提案が、都市部だけでなく農村部まで、また子どもから高齢者まで広がり始めている。では、ダンボールコンポストの何が人を惹きつけるのだろうか。



写真2. 賑わう出張講座

③ コンポスト活動の魅力とは？

平成16年5月に循生研が発行した冊子には、市民アンケートの結果（160人対象）をふまえて、ダンボールコンポストに「一石五長」の意義があるとされている。それは、①生ゴミの減量（燃えるゴミの排出日にゴミ袋が軽くなる）、②生ゴミのリサイクル（自宅の花壇・畑に利用）、③子どもの環境教育（自然と親しむ）、④趣味が増える（毎日の楽しみが増える）、⑤地域交流の活発化（近隣の人との関わりができる）である。

コンポスト実施後の意識変化のデータや（「リサイクルを始めた」29%、「ゴミを出す回数を減らした」41%、「家族で環境について話す機会が増えた」14%、「その他」16%）、ゴミ袋の重さの実感データ（「かなり軽くなった」49%、「軽くなった」38%、「変わらない」13%）がそれらを裏付けている。堆肥づくりという趣味的な活動によって、ゴミ減量・リサイクルにつながる喜び、家族や近所同士での会話できる喜びを実感しているといえる。

だが、こうした「意義」だけで人はダンボールコンポストを持続的に取り組めるのだろうか。そこで、データではさらに「簡便さ」をとりあげていることが注目される。このデータを見ると85%（「できた」44%、「まあできた」41%）が初回で堆肥づくりに成功している。理事長であり「コンポストマスター」であるH氏やスタッフ一同、

「やっぱり大きな魅力は簡単さやろうね」と断言する。筆者自身、法人設立前から関わっている関係でアパートのベランダでダンボールコンポストをしているが、一人暮らしの男性でも簡単に、失敗せずできるという実感が強い。

だが、「意義」や「簡便さ」だけで、ダンボールコンポストの魅力を説明するのは難しい。というのも、コンポストには概ね4つの種類があり、「簡便さ」も含めてそれぞれに一長一短があるからだ。冊子には4つの種類の一長一短が次のように整理されている。これはH氏の40年にわたる研究経験に基づいている。

【設置型】畑や庭にポリバケツが刺さった形で設置されているようにみえるタイプ。長所はお金がかからない、生ゴミと庭からでる殆どのモノを処理できる、手間がかからない、容器が丈夫で長持ちする。短所は庭が必要、切り返しに少し力がある、水分調整材が重要など。

【密閉容器型】EM菌などを利用したほかしを使うタイプ。長所は場所をとらない、土に戻した後分解が早い。短所はほかしが必要、土に移してから熟成が必要、未分解で土に戻すため小動物の発生を誘発しやすいなど。

【電動処理機・バイオ型】電気の利用し堆肥化するタイプ。長所は何より手間がかからないこと。短所はランニングコストがかかる、本体が高価、音がうるさい、故障するなど。

【ダンボール型】ダンボール箱を利用するタイプ。長所は悪臭がでにくい、安価、ベランダでできる、生ゴミは何でも可、水分調整が簡単、手軽で労力が要らない。短所は、箱が傷みやすい、雨のかからない場所が必要など。

*『堆肥づくりのススメ～コンポストのある循環生活～』
平成16年5月 循環生活研究所発行より

ところで、ダンボールコンポストに取り組む人々は、コンポスト初心者だけではない。注目したいのは、H氏のように設置型や密閉容器型など幾つかのコンポストを使った経験がある人も多く、その上で「ダンボールコンポストを知ると、すぐにそれを使う」ということである。密閉容器型や設置型は、ダンボール型に比べると簡便さという点では若干の手間やコツが必要に思える。だが、ダンボール型も温度管理や虫除けなど別の手間やコツが必要でもある。また、昨今ではダンボールより簡便で清潔な電動処理機も登場してい

る。それぞれ一長一短がある中で、なぜ人は「やっぱりダンボールコンポストがいい」と言うのであろうか。

4 ダンボールコンポストの世界に感じる愛おしさ

そこで、日々メーリングリストで報告される各会場での受講者の感想をみると、「生ゴミが消えて土になっているのに驚いた」、「生ゴミを入れて温度が上がるのがとても楽しみ」、「〇〇（魚の骨や蟹がらなど）を入れるといい」、「臭いがないのにびっくり!」「微生物を活躍させたい」など、老若男女の別なく「驚き」と「楽しみ」についての感想が非常に多い。これらの驚きや楽しみは、意義や簡便さについてではなく、生ゴミから堆肥へと変化する過程そのものについてであり、自然の力を眼で見、臭いで感じ、触って温度を感じることで生まれた感想である。このことから仮説ではあるが、ダンボール型の魅力とは他のタイプよりも自然を強く実感できる点にあるのではないかと思われる。

さらに「処理するというより生物を育てているという感じがする」という感想も多いことに気付く。スタッフも、2回目の講座時に「〇〇ちゃん」といった風に自分のコンポストに「愛称をつける人が多い」と言う。「ペットやけんね」、これはH氏の談である。ここには、土は生き物であり、餌をあげたいという愛おしむような自然への感性が生まれている。

しかし、なぜ、見えない生物たちにまで愛おしみを感じることができるのか、このことを実証的に裏付けることは難しい。ただ、おそらくは、弱く浅はかな人間が小さな多様な生き物に救われていることを直感的に感じさせてくれるからではないだろうか。微生物は酸素があってもなくても生きていける芸当をもつものが大部分で、酸素がなければ発酵系（嫌気性となり臭いを出す）、あれば「呼吸系」（好気性で臭わない）の働きをする（例えば酵母菌）。ダンボールコンポストをやっていると、同じ微生物なのに、それを人間様だけが手前勝手な都合で「あれは良い菌、それは悪い菌」と考えがちであることに気付かされる。微生物にも好き嫌いの感性があるという（『感性の起源』都甲潔 中公新書）。微生物さんも好き嫌いがあり、

好気性の力をかりることが大事だと直感的にでもわかってくると、人間と土とは仲良しになれるのではないだろうか。40センチ四方の箱の小さな自然との関わりを通して、人間である自らの感性が磨かれるような不思議な醍醐味が、楽しみや喜びにつながり、それが人から人へと伝え広がり始めている気がしてならない。



写真3. 手作り堆肥をもちこんでの菜園講座